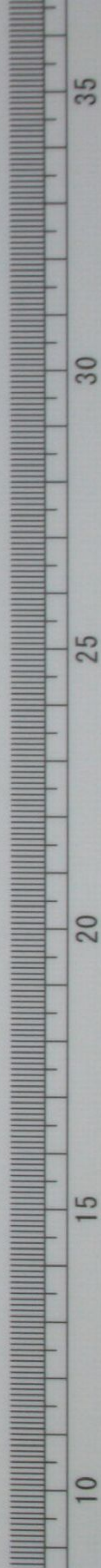


盛夏錄

三

特別
14
1919
193



是れ一巻の天才也、^{霊話}此の書は
活字といふ取柄の最も又
其の描したるをいふんは
染んじり出版する或る
るれを^{何人}と稱す能
い^{味と成らん}也

○日本の露骨と就つてを博しつて
あつた外人もあつた日本のはき不
以を編定して、前掲けたる出づの
いとまの著者は、^{コンナ}一巻とて

東洋原製

その日本人と柔術の術を得て、而して元来
柔術を自分の力に人を教ふるを、^{白人}
力を利用して教ふるあるを、^{白人}力の強よ
人よ、柔術家、甘く教ふる、^{白人}
^{白人}の術、^{白人}の術、^{白人}
及し、^{白人}の術、^{白人}の術、^{白人}
名譽を得たるも、^{白人}の術、^{白人}
敵の方を利用して、^{白人}の術、^{白人}
とて、^{白人}の術、^{白人}の術、^{白人}
ハルン、^{白人}の術、^{白人}の術、^{白人}

す、一編七のトの祖光殿と論じたる所の
戦争のつゝ論及するやえんそるが、其の論
ハ未だマシきいぶ、外人に日本を討つたを
祖光殿と物しするものがあるを、昔
三十日倫敦ミーニングポストに掲げてある英
國海軍大佐アルフレッドステッドと云ふ人の
説である、曰く此のやういふ論議は、技能を
すゝめざるを賞讃するや、左の如くあるなり
建莫日下の兵士は、一見軍人としてゐる
も、いさゝか、彼等の大いさゝか、老成
是故をえ、従つて其名おのをももまは

東林堂

業を、一と云ふ人の如く、内古、昨日彼等の家
ハ、拙を平和にして、其性質を快活する
よ、是等の思ふも、唐氏が戦つた、格
ハ、心ち鬼非のや、いふあると、妻に、露軍の
塹壕を超えて、南山の峰頂に、突進する
よ、いふ、この果して、何の力、いふ、余は、二
の大なる理由の、之、其、想、を、さ、さ、さ、と、さ、さ、さ、
ホ、一、の、理、由、を、彼、等、が、祖、光、殿、宗、拜、の、会、
を、信、じて、刺、殺、さ、る、も、あ、り、而、し、て、い、は、れ、
き、大、なる、執、力、を、具、する、祖、光、殿、を、さ、る、手、を、
つ、い、と、ま、り、を、い、は、る、格、を、さ、る、一、般、の、行、い、

不_レレ_レお_レお_レ的_レ代_レの_レ在_レ子_レ改_レ子_レ基_レを_レき
言_レる_レの_レ人_レを_レま_レく_レ之_レを_レ宗_レ拜_レる_レこと_レし
ま_レる_レこと_レは_レも_レか_レ知_レれ_レ向_レう_レ原_レ因_レと_レす
て_レは_レお_レま_レ又_レ其_レ子_レ孫_レを_レお_レし_レら_レ祀_レえ_レら
ん_レと_レす_レう_レ亦_レ大_レき_レ義_レ務_レを_レお_レう_レる_レ事_レ
西_レ欧_レ諸_レ島_レを_レ考_レう_レて_レを_レ死_レを_レ音_レ入_レん_レ民_レと_レし_レ
の_レ義_レ務_レの_レ終_レ止_レと_レす_レと_レも_レ七_レ日_レを_レお_レう_レ格_レり_レて_レ
お_レう_レて_レ其_レを_レ祭_レ場_レと_レす_レの_レ祀_レを_レし_レて_レ其_レ子_レ孫_レ
が_レ名_レを_レの_レぶ_レる_レお_レし_レて_レ申_レ大_レの_レ言_レを_レ教_レを_レ拂
ふ_レこと_レに_レん_レや_レん_レ兵_レ士_レを_レけ_レし_レて_レ大_レ切_レを_レ現_レさ
し_レて_レ原_レ因_レと_レす_レん_レは_レも_レか_レず_レ荒_レし_レ祀_レ場

東
林
書
院

の_レあ_レら_レし_レて_レ不_レえ_レそ_レの_レ行_レぬ_レあ_レら_レん_レう_レ其_レの_レ彼
一人_レの_レ恥_レ辱_レの_レあ_レら_レし_レて_レ又_レ彼_レの_レ家_レ族_レ彼_レの_レ
祀_レえ_レら_レひ_レ彼_レが_レ子_レ孫_レの_レ恥_レ辱_レを_レし_レて_レ彼_レの_レ現
體_レを_レお_レう_レ其_レの_レ國_レ民_レの_レ物_レを_レ馬_レの_レ列_レの_レ儀_レひ
其_レ名_レを_レ得_レう_レ家_レ族_レの_レ名_レを_レい_レん_レて_レ持_レ教_レせ
ん_レ其_レ禮_レを_レし_レて_レ永_レ取_レ未_レ代_レを_レい_レて_レ清_レむ_レこと_レ
を_レお_レう_レ其_レの_レ祀_レえ_レら_レひ_レ未_レに_レし_レん_レて_レ其_レの_レ子_レ孫_レの_レ
あ_レら_レし_レて_レ其_レの_レ動_レを_レ學_レ習_レせ_レ
し_レて_レ其_レの_レ行_レか_レを_レま_レさん_レと_レす_レし_レて_レも_レさ_レら_レん_レや

而も此の戦場があらゆるほく結ぶ人の心を
動せしむるには當て戦場をたゞ名え
の戦死を遂げざるも千箱にあつた
死に及ぶ死に拵はしむる敵の多きを
と見えし也よまのこころのあはし
おにむすたるもゆしやぬのこころ
と見本の兵を戦死ともあはしこのあつた
利益をとりつるもよまのこころのあはし

神機堂

○早稲田女子評議大会 例年のこと

大澤邸の用をすしにて九月十三日(土)に
定評の基き評議大会を催し
多々あると云ふの評議大会をゆたか
存しと云ふは、その後の名を
人柄も評議大会の改め校
あつたことなること、
塾の塾生たるは、
度ハすも、その評議大会を
る光彩を添へる人物を
ある、巨額の赤字を

七進の校舎と見えて優美なることなるま
 るをあらう。校舎の存をせよと一回開き
 ちの事あること。我の状況を報告すること
 日さうことをする。校舎の進出はあつた
 助をためすの権能を認めらる。▲況
 今ト傍経入つた。評議なるもの度つて今
 ありく云ふん。中にある。▲況
 別々なき。今中をみる。ことなる。つた
 前時の男が推せられた。▲おし又評
 議欠存する年々ある。中なる。我の
 行儀の状況を報告すること。ゆるる。

東洋書院

二十七年(自廿六年九月廿七
 八月)ぬ支の収決算と云ふもの。この
 字をいし出しし。その後と左の
 ぬくひあり

総収入額

金十二萬四千八百十二圓の七角

経常 金十二萬三千五百五十二圓

臨時 金千二百六十九圓の三角

総支出額

金十四萬七千七百九十九圓二角五分

経常 金十一萬八千四百三十五圓

六十四年あるを別表し(支)支出額にありしを以て
 差引金とす六千九百七十七圓十三錢と庫の
 不足を生じしあり。該不足を以て債を以て
 之を補填すべしとあり。償還する債額
 中、金とす六千九百七十七圓十三錢と
 本年の於ては償却ししを以て本年
 には負債金とす六千九百七十七圓十三錢
 一と之を以て四十九圓四十四分
 六厘の於ては債を増加ししとす。此の
 次は本年の償還する債の償還金七千九百七
 十七圓十三錢とす。此の中は本年の於て一とす

東洋銀行

費及運賃費と交換の次年度の初めに
 於て回収し得るものありしを以て此年度の
 収支を略するものありしなり

以つて三十七年、於ける大勢を以てし

三十八年(一九〇一年)の収支

収入総額

金十四萬六千五百八十四圓七十八錢八厘

支出総額

金十五萬八千九百九十四圓十三錢八厘

収支差引

収入も支出も起つた。この頃、
二井を重んじ、自らを破る氣味は
いひなき。文字も、昔の如き。且、
けたる地の事、（全）亦を生まる。此
り、（全）亦を生まる。此
方、三ヶ月、（全）亦を生まる。此
又、（全）亦を生まる。此

此のころ、（全）亦を生まる。此
も、（全）亦を生まる。此
い、（全）亦を生まる。此
係り、（全）亦を生まる。此

東林堂

能く、（全）亦を生まる。此
り、（全）亦を生まる。此
い、（全）亦を生まる。此
め、（全）亦を生まる。此
さ、（全）亦を生まる。此

▲本校の仕度、以上のこと、（全）亦を生まる。此
膨脹した、（全）亦を生まる。此
このことを、（全）亦を生まる。此
増加し、（全）亦を生まる。此
新、（全）亦を生まる。此

収入の内

学費 一一二、九一五、〇〇〇

内訳

大学部

四二、二四〇、〇〇〇

学生二千二百八十名

(二年三百三十名 三年三百三十名 二年三百三十名 三年三百三十名)

十名(予科三期生) 三十一名(減) 一月一名 三月死十一名

専門部

一九、八〇〇、〇〇〇

学生九百名

(政治経済部三年三百名 三十分一減) 一年二百五十名

法律部三年二百名(三十分一減) 一月一名 三月死十一名

十一月

高等師範部

九、六二五、〇〇〇

支出の内

講師給 七二、三八七、〇〇〇

年俸

六二、九七九、〇〇〇

昭信院

六、四〇八、〇〇〇

高等科 三〇、二五〇、〇〇〇

学生一千二百名、三月二月五十一名、十一月

今 一期 一一、〇〇〇、〇〇〇

学生一千二百名、二月五十一名、四月

学生三百五十名

(二三年二百名(一割五分減) 一月五十一名 三月二月五十一名)

十一月

京橋科一期 三〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇
自四月至七月

職員給 一〇、三九〇、〇〇〇、〇〇〇

教務主任給 三、五一〇、〇〇〇、〇〇〇

事務員給 六、八八〇、〇〇〇、〇〇〇

▲基金の金と基金の運用費とをまきかきあわせ
委員長の推し一切の事を委員長に引渡し
以上、評議委員会に提出し、報告を促すこと
すべし

入込金

三〇三、一七一、一七〇

実収額

三三、七二七、一八〇

基金の運用費の給付

十七万。三万五千四百九十元

内

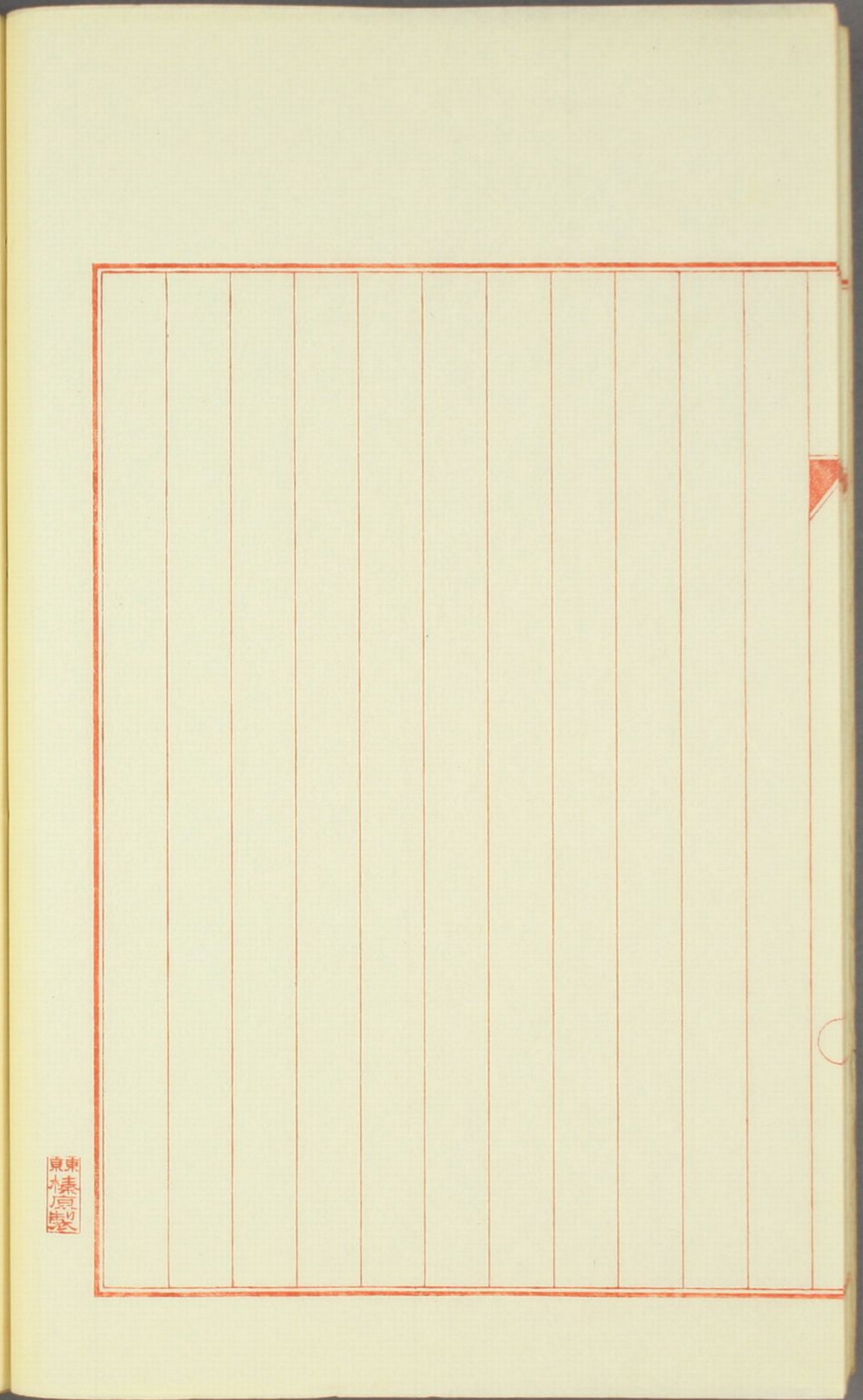
四万六千九百三十四円 借入金

此内三萬のハ基金の給付

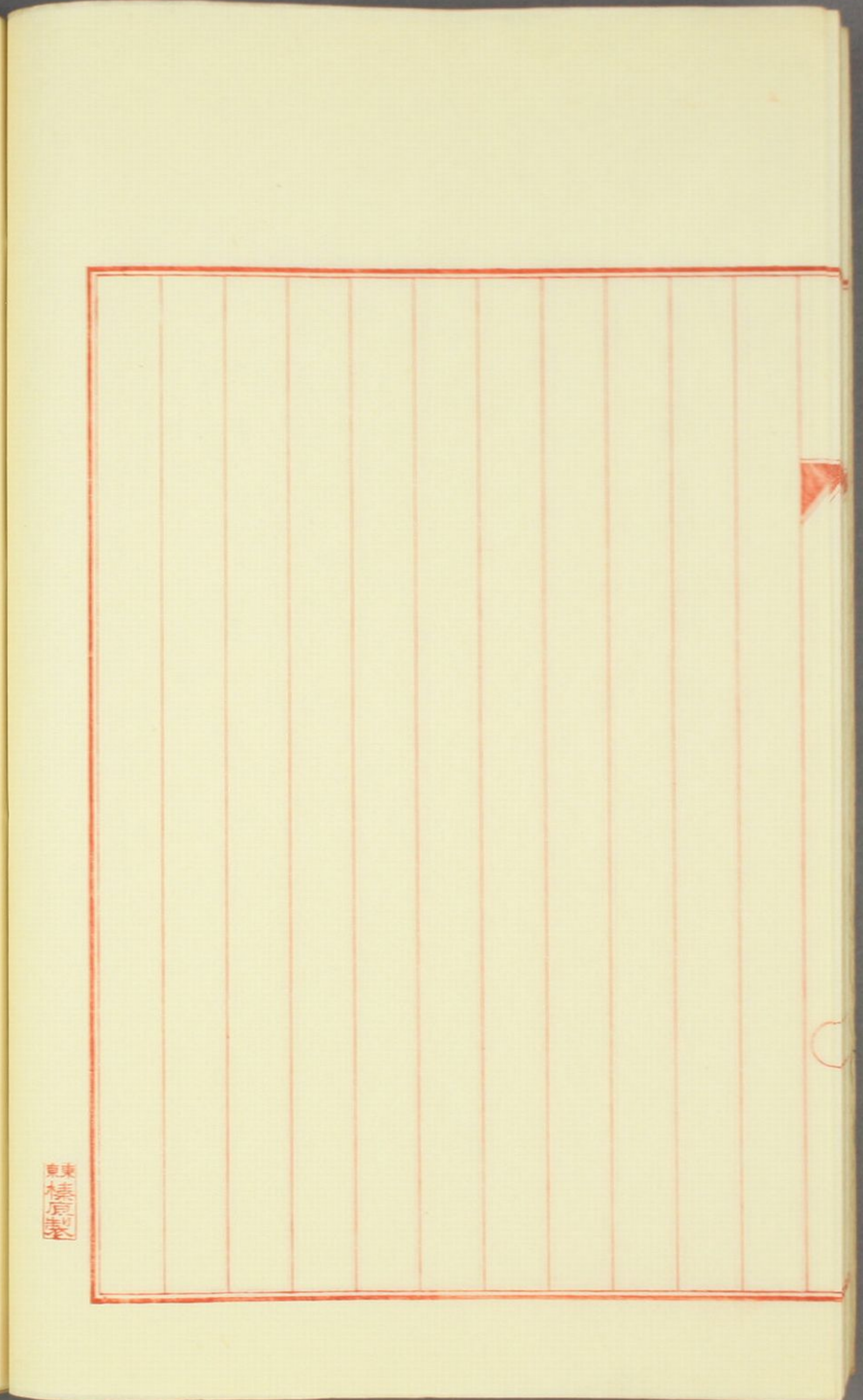
基金の運用費の給付を要する一事を決定し又共
済の資金を不足し不起るよう注意し
のりえと千圓のままとし前記の事を
以上のこととす。これを報告する

て、母のふもあはれに此のなる倣ふこと尚と
又たふもあはれに

▲次なるのさるる施設を第一商科を
金と用ゆること、第二の術の善なるを計る
るゝ本振ふる格に、第三の海義の物と
教科の溝溝をせむとよき、第四の公衆の
聴心をなす事、第五の工ルロー、シツパ
を置く事、第六の尋常科のあはれ、
第七の科目を、第八の聴心をなす事、
第九の聴心をなす事、第十の聴心をなす
る施設をなす



東棧原製



東樓原製

後年也、仕懸又々年と少と地をのやも
あつけんこしつあをふともなきのしも入て
もはをまするふんこ也大いさううをまこの
をまけつとそつう人のあひるまうそつ
あうけんちとおさるまを縄丁ふか
ま

と注しある通て本書の内容がえ合寓
さんころころの也

大破をいそも海舟に地城ししおひ城とまうて
そつうあつて編る代さうおひ城しし
案えにえん、京傳のころもあつておひ城とま



あつてお教寺を(ヤ)とてしつて
い出改したよとえん、仕懸又々年と
りえを、標名が舟があつて、まうて、
描してあつ、土地の風、松も目ええ、松
あつてあつ、まうて、あつて、

筆を(ま)をみつけ、
あつて、あつて、あつて、あつて、

つめもんね、あつて、あつて、あつて、
アイ、あつて、あつて、あつて、あつて、

あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、
あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、
あつて、あつて、あつて、あつて、あつて、

事傳の書いには、本と云ふこと、エーエ
 の言も、その外、又土記其の代の風俗
 か、言つて、世の考を、
 こと、
 とも、
 本、
 い、
 印を、
 道、

(前巻) 伊、

出、
 ち、
 の、
 か、
 こ、
 一、

おひらう汗をふせくころころと
モレハもあまうころころと
ころころとアアアアアアアアア
まうまうまうまうまうまう
けしけしけしけしけしけしけし
かきわきわきわきわきわきわ
へ引つこまこまこまこまこま
出さすは入るは出さすは入るは
まをすまをすまをすまをすま
たびく廊りく出さすは入るは
たうころころのあまのをほくほくお

東林堂

の、師をのを師のま中りの似
にアアおくう揚見のころころ
アアおくハハハハハハハハハ
うげくまのころころころころ
あふふふふふふふふふふふ
けし引まうまきまきまきまき
ころころころころころころころ
たぐくあまうまうまうまうま
まうまうまうまうまうまう
猪牙船心驚いのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのま

うをのうらぎもさながらまのこの四つ角を
抱くは女帝の言をゆらんはまきり海
の月のる節分をこゝろ十二夜の坊子こゝろ七
ぬまの坊子こゝろけし海こゝろまきり寝
けしをこゝろ正月の初夢をこゝろ買し
の一月やの冬世ををんり表徳びよこさ
せ大いそいとせりの夢をみつれと春をやア
舟梁の疾うりりたる抱ふさまおとこ
の出立衣身をこゝろうりりといくらつ子
供がつうふ床をのそんりやうハどの位
ふ床をいくらつうりりあこもるあをのさ

東林堂製

んぞしの空まのれふこのゆきを何流びの
をとちりあこもるまむづつうまのまこんび
あいのこころいんどのかこのとま手をつ
いぢりこころいんどのかこのとま手をつ
みぢりこころいんどのかこのとま手をつ
ふ

清きやの柳糸誰れもまの鏡終
まほの草一政、女の一期まこをかくるひあ
〜

○ 長秋禱念を風末の露心ひあこもる
傷心のゆゑあえん決しんあかひさるあこもる

これらもまた、
あつたての、
はげまき、
くごの、
一、
おけ、
わん、

一いふは、
お、
お、
お、

東
林
院
印

の、
う、
の、
後、
以、
但、
の、

中、
ま、
あ、

鏡ハちよふの懸體つらみのなきうらむもきり
おつ網を垂のみにけりまきまきせんるつ
うの無うを敷く 貨もやハ大岡に
の二倫目と習え新、うらむのやを一番の
名海の懸曲入二むんとまらうつておれ
う、石にお菜を穿るふんし 奴ハ
寄坊う口をうけ、来ん門びまらふ
直下まきゆる出せぬま 網を垂火鉢の茶
ろうしと九こまをまき、むんとうまきま
ぶ衣の川のしをんぬる、あはあもるの
二階といつおにいづむとりぢく

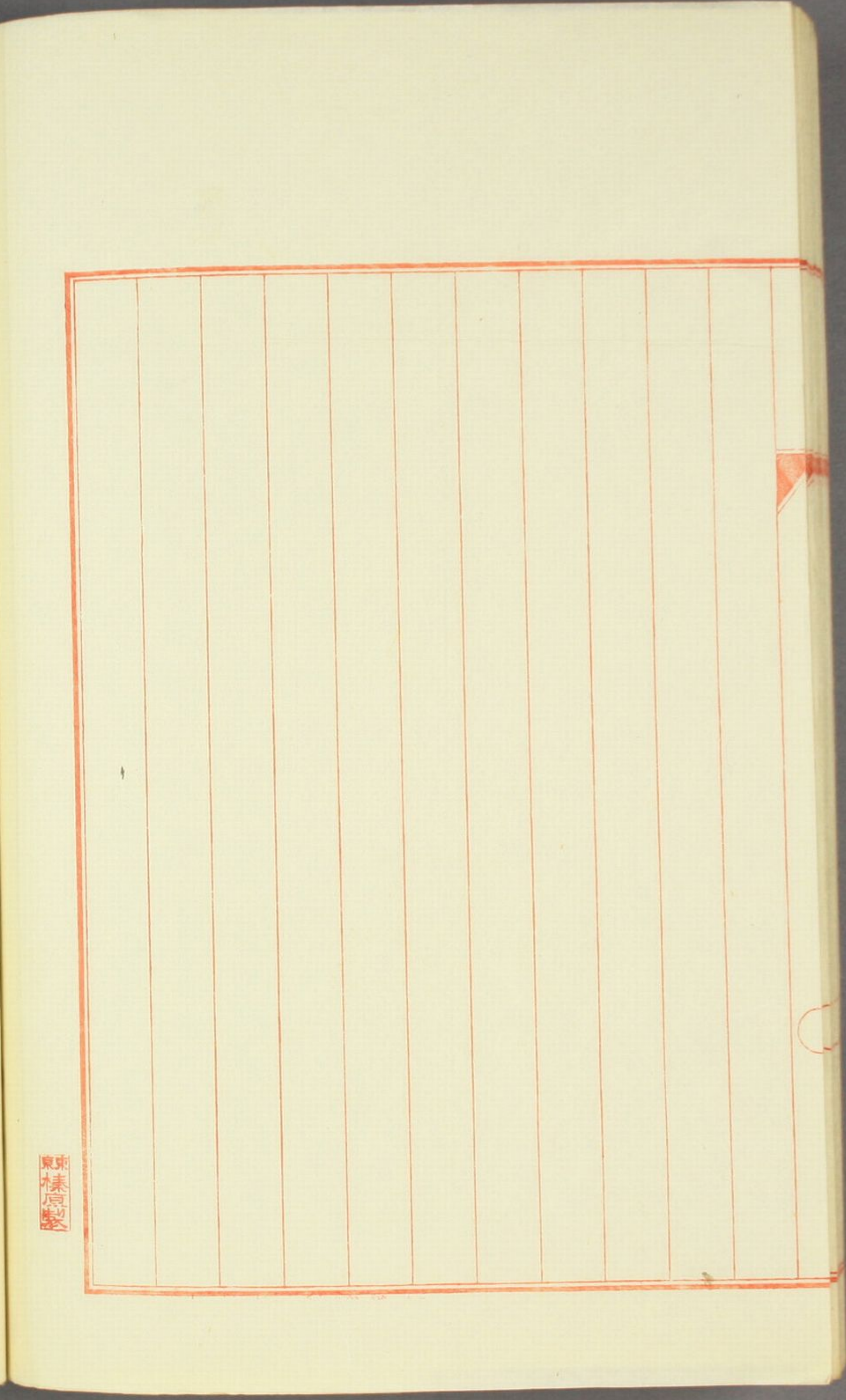
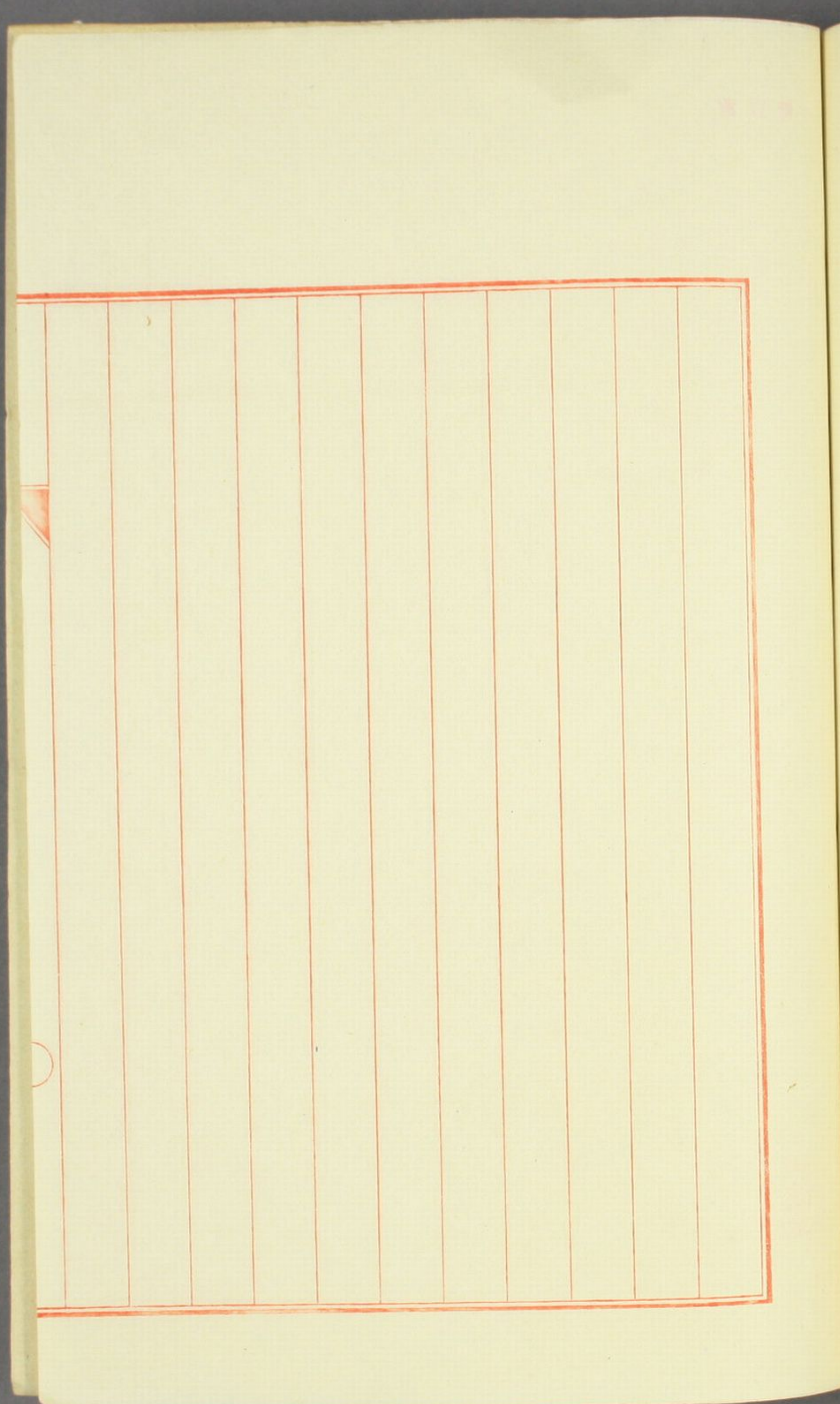
東林堂表

か渡のきまのつらみる梅とらふぬま
用地的のつらみる梅とらふぬま
け六ハかのつらみる梅とらふぬま
ぶあおしうらむくうま 梅むら
えむとを佃田つらみのつらみる梅とらふぬま
とうおしうらむくうまのつらみる梅とらふぬま
紅粉の唇をうらむくうまのつらみる梅とらふぬま
ささの唇をうらむくうまのつらみる梅とらふぬま
さめをうらむくうまのつらみる梅とらふぬま
くうらむくうまのつらみる梅とらふぬま

こいも^①ぶ^②ふ^③お^④し^⑤め^⑥し^⑦り^⑧お^⑨ひ^⑩ひ^⑪ひ^⑫
む^⑬い^⑭ち^⑮ま^⑯び^⑰い^⑱ふ^⑲り^⑳ま^㉑れ^㉒、志^㉓ん^㉔を^㉕ら^㉖ぶ^㉗
ハ大^㉘終^㉙の^㉚が^㉛つ^㉜ら^㉝お^㉞し^㉟、け^㊱い^㊲大^㊳終^㊴の^㊵
志^㊶あり^㊷び^㊸ら^㊹し^㊺の^㊻終^㊼を^㊽ぬ、天^㊾神^㊿終^㊿、
ひ^㊿ら^㊿の^㊿こ^㊿ん^㊿ぶ^㊿う^㊿を^㊿さ^㊿ら^㊿ぬ^㊿ら^㊿い^㊿ん^㊿
り^㊿あ^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、あ^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、む^㊿ら^㊿あ^㊿ら^㊿ひ^㊿
ふ^㊿の^㊿さ^㊿ら^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、あ^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、む^㊿ら^㊿あ^㊿ら^㊿ひ^㊿
かり^㊿こ^㊿う^㊿ま^㊿さ^㊿の^㊿の^㊿お^㊿ま^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、あ^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、む^㊿ら^㊿あ^㊿ら^㊿ひ^㊿
終^㊿の^㊿ま^㊿さ^㊿ら^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、あ^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、む^㊿ら^㊿あ^㊿ら^㊿ひ^㊿
う^㊿ん^㊿し^㊿こ^㊿う^㊿ま^㊿さ^㊿ら^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、あ^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、む^㊿ら^㊿あ^㊿ら^㊿ひ^㊿
終^㊿を^㊿め^㊿る^㊿ま^㊿さ^㊿ら^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、あ^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、む^㊿ら^㊿あ^㊿ら^㊿ひ^㊿
海

東洋書院

あ^㊿ら^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、あ^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、む^㊿ら^㊿あ^㊿ら^㊿ひ^㊿
と^㊿ら^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、あ^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、む^㊿ら^㊿あ^㊿ら^㊿ひ^㊿
あ^㊿ら^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、あ^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、む^㊿ら^㊿あ^㊿ら^㊿ひ^㊿
かり^㊿こ^㊿う^㊿ま^㊿さ^㊿ら^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、あ^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、む^㊿ら^㊿あ^㊿ら^㊿ひ^㊿
を^㊿め^㊿る^㊿ま^㊿さ^㊿ら^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、あ^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、む^㊿ら^㊿あ^㊿ら^㊿ひ^㊿
の^㊿流^㊿を^㊿め^㊿る^㊿ま^㊿さ^㊿ら^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、あ^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、む^㊿ら^㊿あ^㊿ら^㊿ひ^㊿
う^㊿け^㊿ら^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、あ^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、む^㊿ら^㊿あ^㊿ら^㊿ひ^㊿
油^㊿を^㊿め^㊿る^㊿ま^㊿さ^㊿ら^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、あ^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、む^㊿ら^㊿あ^㊿ら^㊿ひ^㊿
る^㊿え^㊿く^㊿せ^㊿ら^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、あ^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、む^㊿ら^㊿あ^㊿ら^㊿ひ^㊿
え^㊿ら^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、あ^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、む^㊿ら^㊿あ^㊿ら^㊿ひ^㊿
え^㊿ん^㊿志^㊿ま^㊿ら^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、あ^㊿い^㊿ら^㊿お^㊿し^㊿、む^㊿ら^㊿あ^㊿ら^㊿ひ^㊿
海



關寬室

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

關寬室

明治三十七年七

月十八日起筆

才女城子人